令和元年度　幼・保・小連携推進事業

第5回　幼・保・小合同研修会

と　き　令和元年 11 月 18 日（月）午後３時～午後４時４０分
ところ　郡山市総合福祉センター５階集会室

講　演　「発達障がいと愛着障がいから子どもの支援を考える」
講　師　実践女子大学生活科学部　教授　塩川　宏郷　先生

塩川先生は、発達行動小児科学・小児精神医学が専門であり、自閉症や注意欠如多動症など、発達障がいのある子どもの早期発見や地域支援のあり方、子どもの精神疾患のケアシステムや子どもの保健医療などについて研究をされている。

先生は、東ティモール大使館や東京少年鑑別所、様々な医療現場に勤務された経験に基づく専門的な内容や支援のあり方を具体的な事例を示しながら、参加者が抱える日々の指導上の問題や悩みに寄り添ってお話しくださった。

《講演内容》

〇自閉症の原因：医学的な解釈
・自閉症罹患者の 40%にゲノム異常や遺伝子異常が検出されている。
・自閉症の子が何に困っているか、医療的には考えていない。

〇「発達障がい」と地域社会との関係
・地域社会と上手に適応できる場合は障がいとは言わない。
・地域社会において障がい者の持ち味を上手く利用し、お互いに補い合うという考え方で社会に参加できるようにしていく。

〇虐待が及ぼす影響
・ネグレクト、身体的ネグレクト、心理的ネグレクト、医療ネグレクト、教育ネグレクト（子どもに能力以上のものを強要する）
・虐待がなぜ重大かというと、子どもの脳と子どもの心を壊すからである。
・虐待が子どもの心に与える影響を読み解くためのキーワードは、「アタッチメント（愛着）の障がい」と「トラウマ心的外傷」」。　守ってもらえるという気持ちが阻害されると混乱した世界にいる。症状の特徴は、凍りついた凝視・うつろな目。
・「トラウマ」は守ってくれるべき大人から受けるもの。安心、安全、守ってもらえる経験ができないと健全な発育が阻害される。

〇被虐待児への対応
・何より早期発見。　※気になる子は放っておいても良くはならない。
・安全な環境、状況を与える。（育ちの場を確保）育ち直しをする。
・生活の中で治療をする。（環境療法、治療の場を確保）

郡山市総合教育支援センター

令和元年度　幼・保・小連携推進事業

〇問題行動に対するコツ

・「問題行動」には必ずストーリーがある。行動の成り立ちを読み取る。

・行動を３つに分類

　１）好ましい行動・増やしたい行動→「ほめる」

　２）好ましくない行動、減らしたい行動→「無視する」

　３）危険な行動→「制限する」

〇正しい褒め方、叱り方

・表情を優しく視線を合わせ、できるだけ近くに行って動作を含めてことばで伝える。

・期待する 10%でよしとする。～ギリギリセーフ～大失敗や大問題にならなければよしとする。

・視線を合わせできるだけ近くに行って、淡々と伝える。

・「どこがいけないのか」、「次はどうするか」を具体的に伝える。

〇対応の基本姿勢

・臨機応変・・・現状維持、悪化するような対応をしない。

・試行錯誤・・・上手くいった対応だけを続ける。

・ネバーギブアップ・・・失敗は再発防止を講じるチャンス。

〇保護者支援

・障がいの正しい理解。保護者理解。

・子どもは自分の力で伸びようとする、それを見守る、支える。

・保護者はストレスや不安を抱えている。

・子どもの最善の幸せを考える。保護者と同じ方向（子どもの最善の利益）を見て支援する。

・「上手くいった」体験を一緒に作る。

・何かの理由があってこうせざるを得ないのだろうという理解。

・保護者との距離感を考える。

・基本的な姿勢としては、「傾聴」・「事実関係の整理」

・あいまいな対応はしない。

・一人で抱え込まず組織で対応する。

何気ない日常に幸せがあると思えること。

参加者のアンケートから

・子どもの障がいを個性と捉え、その良さを伸ばしていくことが支援の基本と改めて思いました。

・ストーリーを読み取り、具体的に別の行動を教える、無表情で淡々と叱るなど実践に役立てて行きたいと思います。

・日頃悩み考えていたことだったので、大変参考になりました。実践しながら臨機応変に試行錯誤し、「ギリギリセーフ」を探して褒めて伸ばして行きたいと思います。

・虐待を受けると脳や心が犯され発達障がいのようになるということはとても驚きでした。

・クラスに複数の気になる子がいます。どのような対応が効果的か個々によって違いがあると思いますが、毎日手探りで支援をしている中、今日の先生のお話はとても心強かったです。

・事例や詳しい説明があり、とても分かりやすかったです。「体験世界」について、自分が見えたものと同じと考えてしまっていたが、そうではないと改めて知ることができました。

・子どもたちや保護者に対してもっと寄り添い理解者になっていくことが子どもにとって良い環境を作っていくことに繋がると思いました。

・子どもが「何ができるのか」「何ができたのか」を見て、スモールステップを大切にしながらともに成長して行きたいと思います。

郡山市総合教育支援センター